

『新純星余情和歌十箇条 — 現代標準語序 —』 岩崎純一 著

『新純星余情和歌集 — 現代標準語序 —』

しんじゅんせいよせいわかしゅう

岩崎純一 著

2009年1月5日

掲載サイト：<http://iwasakijunichi.net/>

『新純星余情和歌集』とは、私が今までに詠んだ和歌のうち、恐れ多くも内容面・技巧面で特に見るべき点があるとして他撰された歌、または私自身が好んでおり自撰した歌を、和歌集としてまとめたものである。古典のいわゆる勅撰和歌集や私撰集、私家集にならった部立てとなっている。

私の歌風は、歌人の皆様からは、『新古今和歌集』時代、とりわけ九条良経・藤原家隆・藤原定家・正徹の余情妖艶（よせいようえん）美を極端に推し進めたものとされることが多い。

確かに私は、自分自身の日記代わりや生活の記録、人生体験談としての和歌を詠むことはほとんどなく、和歌の作者（私）と和歌の主人公とが異なる、完全創作の唯美主義的な題詠歌を中心に詠んでいる。私の和歌観の全貌については歌道論などを参照されたい。

もっとも、私の歌風が新古今風を極端に推し進めた唯美主義的な和歌と言われることについては、むしろ大変に嬉しく思っている。具体的には、以下のような評を受けたことがある。

私自身は、日本画・仏教画・水墨画および西洋の象徴派絵画を古典日本語で描いているという言い回しが、極めて実感に近いと考えている。ただし、単に陰鬱であるということではない。

「新『新古今』派」（園井長光氏：現代語訳担当者・和歌研究者）

「魔術耽美主義」・「現実を魔境化する唯美主義」（戸井留子氏：余情会会員）

「シュールサダイヘスム（超“定家”主義）」（雪実少納言氏：糸姫会会員）

「本格的に定家に近い」・「(定家との) 生来的な共通性」（水垣久氏：和歌研究者・やまとうた運営者）

そういえば、文学では、エルンスト・ユンガーやカフカも「魔術的リアリズム」と言われるのであった。

本集は、古代・中古・中世日本の和歌集の世界を、現代において、特にネット上で疑似的に再現してみようとの試みでもある。また、和歌だけでなく、稀に散文が入ったり音楽が入ったりすると思う。いつかは出版したいとも思う。

ちなみに、私は「共感覚」という（成人になると衰えるとされる）感覚を持っている。突然これを書くと、神経科学・生理学の専門家でもない限り驚かれることがしばしばであるが、簡単に言えば、いわゆる音波が視覚（色覚）で見えたり、可視光線（または電磁波全般）が聴覚で聞こえたりしているらしい。

この感覚については、すでに東京大学などでおこなわれた実験にて検証済みであり、拙著が出版されたり、大学・学会で共感覚関連の授業・講演をおこなったりしているばかりでなく、元より和歌もこの感覚を大いに用いて詠んでいる。

何より、実は「共感覚」なる用語と概念は、和歌研究者・日本文学者・東洋思想家など

の間では、この感覚の实在が科学的に証明される以前より注目され、使用されているのである。後年に科学によってようやく検証され信用されることとなった知覚現象を、和歌論者が先んじて取り上げていた事実に、心から歓喜と敬意とを覚える。

ともかく、「かつての日本人の共感覚性の豊かさ」を懐古し確認するにあたり、和歌が最良の材料の一つであることは間違いないようである。

和歌が単に「短歌」と呼ばれるに至り、カタカナ語・外来語・俗語が自由に使えるようになったことは、「五・七・五・七・七」の形式の大衆化をもたらしたが、その恩恵の一方で、いわゆる歌語・雅語による和歌が詠まれる機会は少なくなっているようである。

現在、「歌人」と言えば近現代短歌を詠む「職業歌人」を指し、私の場合のように、天皇・皇族・旧皇族・旧華族・旧公家などの出身者以外で、和歌の詠進によって何らかの対価・報酬を得たり、和歌を買い取ってもらえた経験のある一般国民（いわば「職業和歌人」の経験者）は、かなり少ないようである。ほんの数首であっても、大変に嬉しく光栄なことである。

ただし、「和歌が好きである」との心が最も大切であることに変わりはなく、和歌に感動を覚えてやまない心のある者が、和歌の興趣を人に伝えていくことも大切であると思う。

一方で、和歌には「歌枕・掛詞・縁語などの技術的な部分」がもっぱら京都の上流の人間本位に構成されている」という京都中心主義的な特徴があり、こればかりはどうしても、今後の和歌の普及においては発展的に打破される（「守・破・離」の「破」と「離」が実践される）ことが望ましいと思う。

例えば、「花野」という美しい言葉は、もうそれだけで「主に京都・奈良の自然環境の範囲内で咲きうる種類の、秋の花の風景」を表す語で、それ以外の土地の花、それ以外の種類の花、それ以外の季節と気候の花の風景を「花野」と呼んでしまおうものなら、不思議と新古今時代の和歌では野暮になってしまう。

しかし、「花野」という美しい言葉くらい、今やどの日本の土地や種類や季節や気候の花の風景にも使いたいと、私は思っている。

日本語という言語が天皇や公家だけのものではなく、日本人全体のものになった以上、これからの和歌は「地方分散的に伝統的」であることが望ましく、優雅な言葉が全国の世俗に行き渡り使われることも立派な文化である、というのが私の考えである。

ヒト・モノ・カネが東京に一極集中し、人口重心が東進する今の時代に、「日本国」としては「中央集権的に革新的」な状況が続いているにせよ、「日本文化」としての「和歌」はそのような性質を脱することが望ましいと思うのである。

優雅で美しいやまとことば（京都的な教養と知性）で現代日本の地方人（岡山県出身者）なりの素朴な心（万葉集的な情緒や感性）が自分に詠めるかどうか、新しい和歌の姿に挑戦していきたいと思う。